

第8回考古天文学会議（2024年8月17日）

-於 だて歴史の杜カルチャーセンター（伊達市）

「アイヌ民族と日蝕」

—記録された日蝕の事例について

今野 利秋（アジアの星物語プロジェクト）

自己紹介

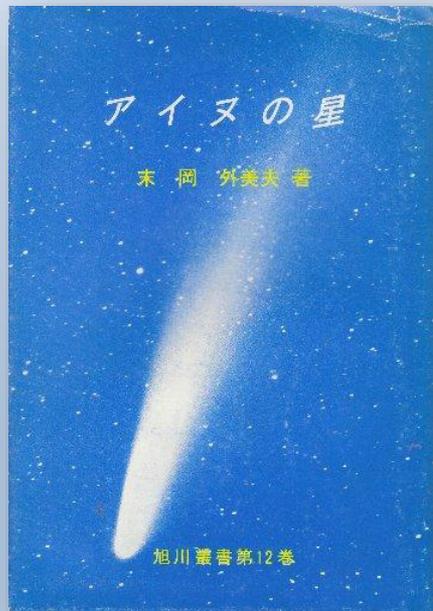
- ・室蘭生まれ、旭川育ち。長和に、母方の祖父と祖母がいました。
高校生の頃にアイヌ民族の星の文化との最初の出会い
大学時代、札幌市青少年科学館の天文ボランティア。
- ・プラネタリウム番組の企画、シナリオ、演出の仕事。
- ・各地の七夕を訪ね歩きつつ、「ろうそくもらい」のルーツを探っている。
道内の明治や昭和の金環、皆既日食の記録と記憶の調査中。
- ・アジアの星物語プロジェクトのメンバー。



1. はじめにーアイヌ民族の星の文化と末岡外美夫氏

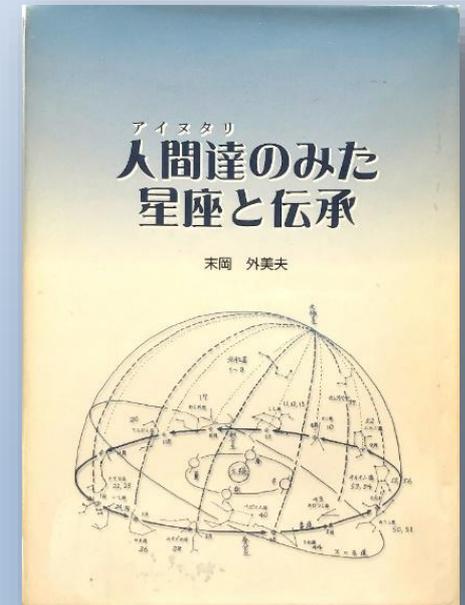
(1) 末岡外美夫氏という存在

旭川市に生まれ、各地のアイヌ民族の古老から星の話を聞き取った。
アイヌ民族の星の文化を語るときに欠かせない業績を残した人物。



氏の著作物の中で、現在も図書館等で比較的手に取りやすいのがこの二冊。アイヌ民族の星文化紹介の際、出典や参考文献とされるのはほぼこの二冊。出版、テレビ、プラネタリウム…。

(→レジュメp1)



1. はじめにーアイヌ民族の星の文化と末岡外美夫氏

(2) 末岡氏の著書におけるアイヌ民族の日蝕

- ・ チュプ・ライ (cup・ray 太陽が・死ぬ=日食) [Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ]
- ・ チュプ・サンペ・ウェン(cup・sanpe・wen 太陽・の心臓・が病む)[H]
- ・ トカプ・チュプ・ライ(tokap・cup・ray 日中の・天体[太陽]・が死ぬ)[Ⅰ・Ⅱ]
- ・ トカム・シリクンネ (tokam・sirkunne < tokap・sirkunne
日[太陽]・が暗くなる)[Ⅳ]
- ・ チュパンコイキ(cupankoyki > cup ankoyki 太陽をわれわれが吐る=日食) [H]
- ・ チュプ・チルキ (cup・ciruki 太陽・が呑まれた) [Ⅳ・Ⅴ]
- ・ チュプ・カシ・クルカム (cup・kasi・kurkam > cup・kasi・kur・kam
太陽・の上を・魔者・がかぶさる) [Ⅰ・Ⅳ]

1. はじめにーアイヌ民族の星の文化と末岡外美夫氏

(2) 末岡氏の著書におけるアイヌ民族の日蝕

- ・ チュプ・ライ (cup・ray 太陽が・死ぬ=日食) [Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ]
- ・ チュプ・サンペ・ウェン (cup・sanpe・wen 太陽・の心臓・が病む) [H]
- ・ トカプ・チュプ・ライ (tokap・cup・ray 日中の・天体[太陽]・が死ぬ) [Ⅰ・Ⅱ]
- ・ トカム・シリクンネ (tokam・sirkunne < tokap・sirkunne
日[太陽]・が暗くなる) [Ⅳ]
- ・ チュパンコイキ (cupankoyki > cup ankoyki 太陽をわれわれが叱る=日食) [H]
- ・ チュプ・チルキ (cup・ciruki 太陽・が呑まれた) [Ⅳ・Ⅴ]
- ・ チュプ・カシ・クルカム (cup・kasi・kurkam > cup・kasi・kur・kam
太陽・の上を・魔者・がかぶさる) [Ⅰ・Ⅳ]

1. はじめにーアイヌ民族の星の文化と末岡外美夫氏

[I ・ II] の地方 （後志、渡島、檜山、胆振、石狩、日高（西側2/3程度））

白や桶を外に持ち出して

フホー ホーイ

ホーイ ホーイ

と叫びながら、太陽の姿が回復するまで打ち鳴らしている。

チュプカムイ 太陽のカムイよ

タスム 病気が

ペムパン 早く

リテン・クス・ネ・ナ 治りますように

と祈る。

1936(昭和11)年6月19日利尻から斜里へ抜けた皆既日食は、白老の浜に点在していたコタンの上に、暗い影を落した。当時の白老の宮本エカシマトク首長夫妻は、正装して屋根にのぼって太陽の回復を祈念した。エカシマトク首長がイナウを捧げてチュプカムイの回復を祈る間、傍に水を入れた器を置いた夫人は、正座したまま柳の枝で天に水を振り掛けていたと伝えられている。 ※『アイヌタリ』 p68, 69 (→レジュメp3)

1. はじめにーアイヌ民族の星の文化と末岡外美夫氏

[Ⅲ]の東部海岸地方

(胆振、日高(東側1/3程度)、十勝、釧路、根室、オホーツク(中部東部))
器に清水を汲んできて、その水をイナウや笹の葉で天に向って振り掛け、心の中で
チュプカムイの回復を祈る。別に声を出したり、呪文をとねえることはなかった。

※『アイヌタリ』p69 (→レジュメp3)

[Ⅲ・Ⅳ]の山地

(空知、胆振、日高(東側1/3程度)、十勝、釧路、根室、オホーツク、上川)
手近にある桶や器を木切れでカマかせに叩いて、つぎのように叫ぶ。

チュプカムイ	お日さま
ホーイ	ホーイ
エライ ナー	あんたは死ぬよー
ホーイ	ホーイ
ヤイヌパ	息をふきかえせ
ホーイ	ホーイ

※『アイヌタリ』p69 (→レジュメp3)

1. はじめにーアイヌ民族の星の文化と末岡外美夫氏

[V]の地方（留萌、宗谷、上川（北部）、オホーツク（北西部））

身近な物を叩いて駆け回り、つぎのような文句を声高に叫ぶ。

チュプカムイ チュプカムイよ。

エアト° 吐き出せ

エアト° 吐き出せ

ホーイ オーイ ホーイ オーイ

久しい間、アイヌモシリの日食は、太陽が魔者に呑み込まれるために起る現象と信じられていた。太陽を呑み込む魔者は、オキナ (okina > ok・ina 鯨の化物)あるいはシト°ンペ (situnpe > situ・un・pe山奥・にいる・もの=黒狐)とよばれるものであるが、その正体はあまり明確ではない。オキナあるいはシオキナ (siokina > si・okina 大きな・化物鯨)とよばれる化物鯨は想像を絶した大きさと、上顎は天空にまで届き、空に浮かんでいる太陽をひと呑みにしたと言う。一方シト°ンペ、あるいはクンネスマリ (kunesumari > kunne・sumari 黒い・狐)とよばれる架空の黒狐は、アイヌモシリの中北部ではチュプカムイを襲って日食を引き起こす程の悪魔的野性と信じられていたが、南部ではコタンを守護する重いカムイとして、崇拝の対象となっていた。 ※『アイヌタリ』p70,71 (→レジュメp4)

2. その他の事例から

(1) 知里真志保

アイヌの首長の家系に生まれた言語学者、民族学者。アイヌ語辞典、口承文芸や文化史的な論文を多く残している。知里幸恵の弟。

「アイヌに伝承される歌謡詩曲に関する調査研究」『文化財委託研究報告Ⅱ』、文部省文化財保護委員会、1960年

III 日食の際の呪法と呪文

4. 日食に対するアイヌの考え方

アイヌは日食を魔神が日の神を呑むために起るものと考えていた。北海道の中東北部から樺太へかけては、この魔神を妖狐と考え、日食のことを「チュプ・チルキ」(chup-chiruki)「日が・呑まれた」と称する。(→レジュメ p4, 5)

5. 樺太の例

樺太の白浦では日食の際は狐の毛皮で作った帽子を冠り、太鼓でもお盆でも何でもかまわぬから円い物を戸外に持出して(このように円くなれという類感呪術)、はげしく叩きながら、

chux eatu 日を吐き出せ

chux eatu 日を吐き出せ

と唱えた。

6. 北海道の例

十勝国高島村では、日食は海中にオキナと称する大魚のばけものがいて太陽を呑むから起ると考え、舟ばたを叩いたり、近くに舟がない時は板きれを叩いたりしながら、

chup-kamuy お日さま

hōy ホーイ

e-ray nã あんたは死ぬよ

hōy ホーイ

と叫んだ。その際、男は弓矢を持ち出して、日を助けると云って日に向かって矢を射たり、鉄砲があるようになってからはそれを撃ち鳴らしたりした。 (→レジュメp5)

(2) 吉田巖

虻田実業補習学校、平取町荷負尋常小学校、庁立日新尋常小学校などで教員として勤務。任地で児童や親から伝承等を聞き取りして学会に発表した。

「愛郷草紙」東北北海道アイヌ古事風土記資料

帯広市社会教育叢書 第4巻、帯広市教育委員会、p50-51、1958年

日蝕とアイヌ

日月蝕について十勝オトフケのアイヌから親しく聞いた初の凡ては次の話でした。明治40年の1月に「日蝕，月蝕は，日神，月神が死ぬるので大そう悲しいことだ。聚落で見つけると家毎に外に出て手に手に力の限り板の類を叩く。その音をききつけて他の神が助けてやるということだ」と。

又其翌々年2月十勝芽室村ケネのアイヌから聞かされた古伝に「恐しい悪神が，日神を呑もうとする。半分も呑むと暗くなる。その時，鳥が沢山悪神の口に群りはいって日神を助けるともとのように明るくなる。これが日蝕というものである。鳥はこういう働に免じて，何処へでも遠慮なく食物を漁り、人家のを盗んでも、人は見のがしにせねばならぬのだ」 (→レジュメ p6)

日蝕とアイヌ（続き）

一昨年8月、十勝フシコの老翁が「今以て昔と少しも変らぬのは、日、月蝕の時、老人達が揃って外に出て、板を叩き、口口に日又は月に呼びかける謡だ、こればかりは決して、どんな場合にも、この時以外には謡うことを聴かない」と語り、その謡に触れることを避けた。

（略）アイヌの研究家安田巖城氏に拠りますと「古来アイヌは日月蝕に対し全く日、月が死ぬものと考え、日、月蝕の際は、恐れおののき、翁達は、俄に屋外に飛び出し、臼桶を伏せ、手に手に木片、篋などを振って滅多打ちし口に チップライ、ヤンヌーパ、ホイ と幾十百遍となく連誦し、蝕の終るまで、恐怖の句調で唱えつづける」と、言われた。

※(昭和11年6月15日)

(→レジュメp6)

(3) ジョン・バチェラー

1854年にロンドンに生まれる。1877（明治10）に函館に来道。アイヌ民族の生活改善・学校・病院の設立に尽力したイギリス人宣教師。

『ジョン、バチラー自叙傳 我が記憶をたどりて』文禄社、1938年

その年は(一八八七) 日食のある年ですから、私は前から暦を調べてその日と時間を見ておきました。アイヌ人たちに見せて上げようと思って、ガラスを煤で曇らし、その時間の少し前アイヌ人たちを呼び集めガラスを通して日食をはっきりと見せました。ところがアイヌ人たちはいよいよ日が暗くなってくるとその驚き方と申しましたら、そばにいる私の方が驚くくらいでした。皆鳴き声を立てて

「ああ、どうしよう。神様が死ぬ。 ああ神様が死ぬ。世の中は真っ暗になってしまった。私たちはどうすればよいのだろう」と大声で叫びます。水を口に含んで空に吐きかける者、ヒシャクに水を入れてまき散らす者、中には金ダライを叩きタライを打ち、盆を叩いたり、また銅をならす者、鉢をならす者、そうして大声を上げて何か歌を歌いながら踊る騒ぎは…

『アイヌの暮らしと伝承 よみがえる木霊』小松哲郎 訳、北海道
出版企画センター、p213、1999年

死期の近づいた病人が出ると、冷たくて新鮮な水を口に含んでそれを瀕死の状態にある病人の顔や胸に吹きつけてやっていた。これもまた私が見たことであるが、水の入った桶を病人の側まで運んで来て、水に浸した両手や先端がよく分かれた小枝で病人の身体に水滴を撒き散らし、何とか瀕死の状態から脱するようにと手を尽くしていた。その後、長い祈りの言葉が述べられ、激しく嘆き悲しむ声が続くこれと同じようなことが、日蝕や月蝕の際にも同じようにアイヌの村々では行われていた。人びとは家の外に出て、触を受けた太陽や月に向かって水を吹きつけたり撒き散らしたりする。こうすることで、身体を蝕まれて苦しんでいる太陽や月が生き返り、その光を再び取り戻させようとするのである。時によっては、蝕の起きている間じゅう太陽や月に向かって「生き返れよ」と願いの言葉を述べることもあった。ヤナギ（柳）の枝やヨモギ（蓬）を束ねたもので水を撒いた方が、この病める天体を生き返らせるには特に効き目があるとされていた。（→レジュメp7）

ジョン・バチェラーが元室蘭で見た日蝕



1887（明治20）年8月19日

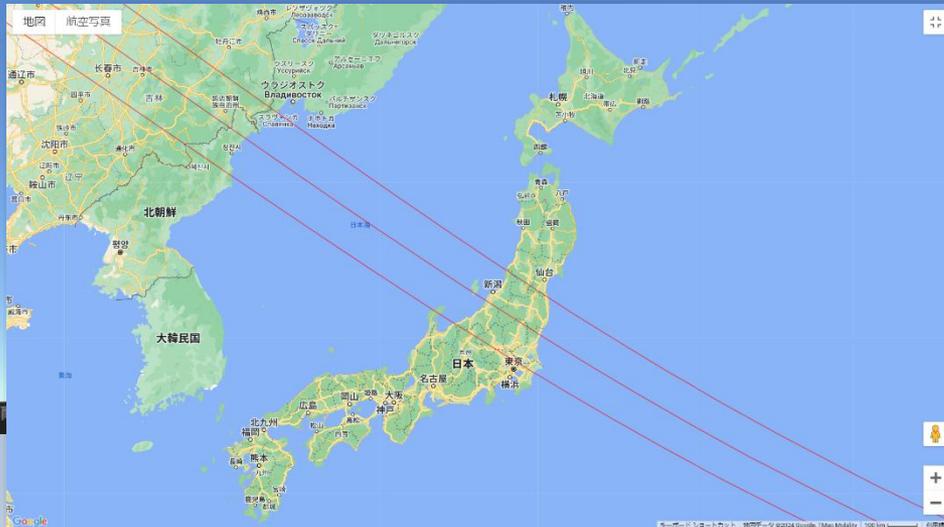
本州の新潟から福島にかけては皆既日蝕

元室蘭では9割ほど欠ける部分日食

食の開始 14:09

食の最大 15:21

食の終了 16:21



(4) 菅江真澄

三河の国生まれで各地を旅し、近世の庶民生活の様子を絵を添えて記した。
1788年から4年間に蝦夷地で過ごし、有珠山へ赴くなど二回旅をした。

『松前と菅江真澄』内田 武志、1949年

「かたみ袋」(文政年間、1820年以降?)

日そく月そくのときは、ふなはたをたたき、こゑをあげて(肥、こゑのかぎり)あふく。
こは、人のわつらはしきことを、月日のうへにのみかけ給ひて、かくわつらひ給へば、
いさめ奉るといふ。 p109

ある夜、あひの舟ごとに、チェツホヤマイカイノホイと、こゑをかきり舟のムタニを
たたきて叫は、日そく月そくのとき、日月のちからつけんとていふなることながら、
こよひの月くらければ、月そくなりけるところ(へ)て、かくは、みなはたをならし
けるといへり。 P113 (→レジュメp7,8)

(5) 北風磯吉

名寄に暮らし、古いテシオアイヌの伝承を伝えるとともに、軍人として農民として生きた。末岡氏も星の文化について聞き取りを行っている。

『北風磯吉資料集 アイヌネノ・アン・アイヌ(より人間的である人間)』
(名寄叢書, 第6巻) 佐藤幸夫、市立名寄図書館、p131-132、1985年

[昭和11年6月19日の皆既食の時のことだと思われるが、尾沢カンシャトク氏は、
『北海道文化財保護功労賞、受賞記念誌』に、次のように書いている。]

戦前のことになるが、アイヌは日食の時に悪神払いの儀式があることを知った。だがどのようなカムイノミをやり、どのようなことをやるのか知っている人がなかなか見つからなかった。だがちょうど昭和9年の日食の時に名寄アイヌ最後の大しゅう長である名寄在住の北風磯吉エカシがこの儀式をやるというので名寄にかけつけ、それに参加すると同時にいろいろ教わってきた。

(当時の様子を次のように語った。)

日食になり、北風さんが屋根に登り右手にエムシ(刀)を持って上下に上げ下げし(刀先を上に向ける)、フチは家の中でまな板を棒で叩いているのを見た。

「昭和46年11月談話」 (→レジュメp8)

北風磯吉氏が儀式を行った1936年の日蝕

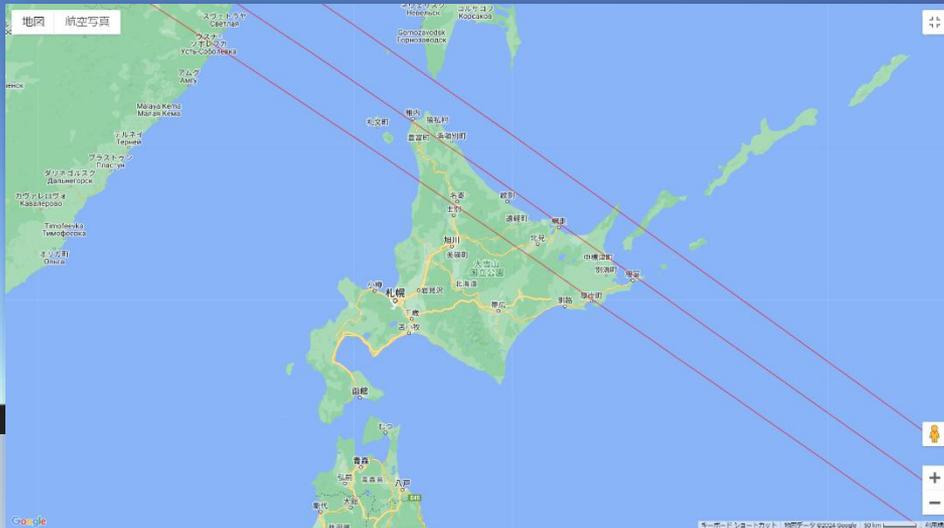
1936（昭和11）年6月19日

皆既日食 名寄では1分程度皆既状態が続いた。

食の開始 14:07

食の最大 15:20

食の終了 16:26



3. 北海道教育委員会の調査報告書

- ・発行は北海道教育委員会 ※出物の一部は北海道文化財保護協会に委託
- ・1968年「アイヌ民俗資料調査報告」が最初
- ・今も発刊されていておよそ200冊の分量。星に関する事例をほぼ抜き出し、整理中。

✓	○	1993	03	平成4年度	アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ VI アイヌのくらしと言葉 3	北海道教育庁 社会教育部文化課	北海道教育委員会	都・札 p206-209 天体名
✓	—	1994	03	平成5年度	アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ VII オイナ(神々の物語)3	北海道教育庁 社会教育部文化課	北海道教育委員会	都・札
✓	○	1995	03	平成6年度	アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ VIII アイヌのくらしと言葉 4	北海道教育庁 生涯学習部文化課	北海道教育委員会	都・札 p260-263 各月の呼称
✓	—	1996	03	平成7年度	アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ IX トウイタク(昔語り) 1	北海道教育庁 生涯学習部文化課	北海道教育委員会	都・札
✓	—	1997	03	平成8年度	アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ X アイヌのくらしと言葉 5	北海道教育庁 生涯学習部文化課	北海道教育委員会	都・札
✓	—	1998	03	平成9年度	アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ XI トウイタク(昔語り) 2	北海道教育庁 生涯学習部文化課	北海道教育委員会	都・札
✓	○	1999	03	平成10年度	アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ XII アイヌのくらしと言葉 6	北海道教育庁 生涯学習部文化課	北海道教育委員会	都・札 p46-54 月や星に関して p152-162 太陽神への祈り
✓	—	2000	03	平成11年度	アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ XIII トウイタク(昔語り) 3	北海道教育庁 生涯学習部文化課	北海道教育委員会	都・札
✓	○	2001	03	平成12年度	アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ XIV アイヌのくらしと言葉 7	北海道教育庁 生涯学習部文化課	北海道教育委員会	都・札 p116,117 耕作時に逃げ去っていない星座
✓	—	2002	03	平成13年度	アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ XV トウイタク(昔語り) 4	北海道教育庁 生涯学習部文化課	北海道教育委員会	都・札

『昭和50年度（無形民俗文化財1）』 p14、1976年

日食の呪文は、広く分布されていて、内容は、大同小異である。太陽は、アイヌにとって重要な神で、チュプカムイ chup-kamuy とよばれる。日食は、chup-kamuy が、魔神によって呑み込まれそうになるために起こるものと考えられていた。そこで十勝地方のように、男は、弓矢を持出して、空に向かって矢を射、太陽を呑みこもうとする魔神を威嚇したり、釧路地方では、お盆や板をはげしく叩きながら太陽に向かって元気づける動作を行う。このときは、すでに述べたような、神を呼ぶ儀礼的な叫びを何度も行い、太陽に向かって呪文を唱える。ここに収録されているものは、次のとおりである。

チュプカムイ ホーイ 太陽よ、 ホーイ

chup-kamuy hoy

エライナ ホーイ あなたは死ぬよ ホーイ

e-ray na hoy

ヤイヌパ ホーイ 息をふきかえせ ホーイ

yaynu-pa hoy

(→レジュメ p9)

『昭和56年度（アイヌ民俗調査Ⅰ 旭川地方）』 p94、1982年

ツプ アン コイキ cup an koyki 日食。

「太陽がいじめられている」という意味。

まな板などを出して、打って大きな音を出し、太陽をいじめている悪神を追い払うと良いと考えられた。

※旭川市の石山長次郎氏 (→レジュメp10)

『昭和59年度（アイヌ民俗調査Ⅳ 静内・浦河・様似地方）』 p129、1985年

日食は、お天道様が地上の病気を全部背負ってくれるから、お天道様が病気になったと考えられていた。「日食になる」ことをチュプ カムイ タスム cup kamuy tasum という。

※様似町の岡本ユミ氏 (→レジュメp10)

『平成10年度（アイヌ民俗調査ⅩⅧ 補足調査Ⅴ）』 p231-232、1999年

◆道東編

太陽と月をチュプカムイ cup kamuy という。昭和11年の日食のとき美幌の野崎に住んでいて、ちょうど「麦の草取りをせ」と言われていた。母は弟を産んだ後で家の中で寝ていた。日食が始まると母は家から出てきて、とっさにヨモギで弓を作り、枯れたヨシを矢にして太陽の方に打つ真似をしながら

チュプカムイ ホー cup kamuy ho:

エライナ ホー érayna ho:

ヤイヌムバ ホー yaynumpa ho:

と歌いながら踊った。「おてんとさん、大変だけど身を守れ（ヤイヌムバ）」という意味の歌だ。矢を射るまねをするのは、太陽に悪い者がかぶさってきたので、その悪者を撃つということだ。

※美幌町の平林ミツエ氏 (→レジュメp12)

平林ミツエ氏が美幌で見た1936年の日蝕

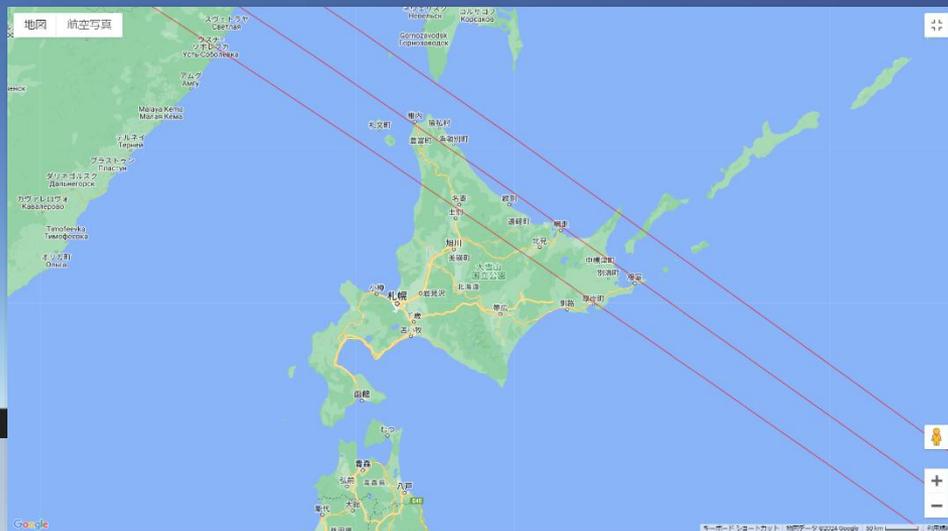
1936（昭和6）年6月19日

美幌は日蝕がより長く見える中心エリアに近かった。

食の開始 14:10

食の最大 15:22

食の終了 16:27



4. さあ、2030年へ!

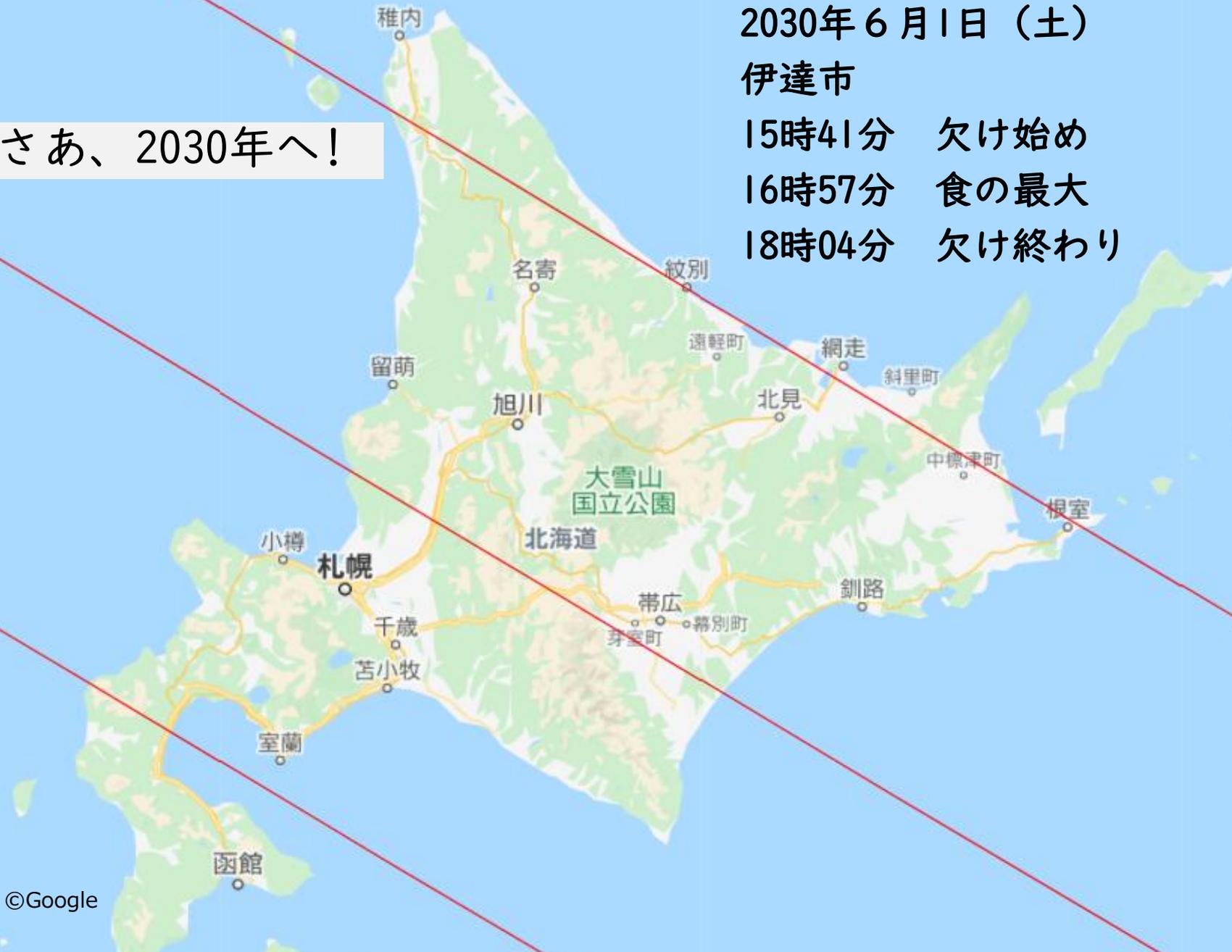
2030年6月1日(土)

伊達市

15時41分 欠け始め

16時57分 食の最大

18時04分 欠け終わり

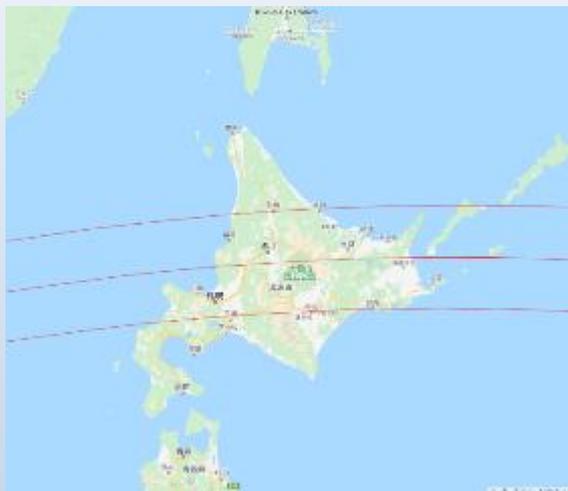




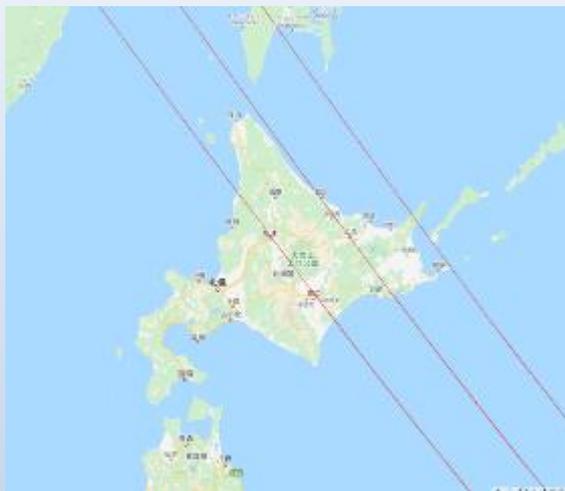
日食まで、あと5年10ヶ月

ご清聴ありがとうございました。

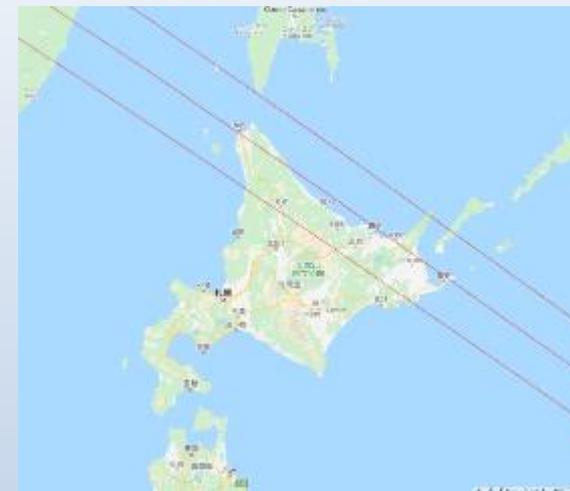
北海道の明治以降の金環・皆既日食



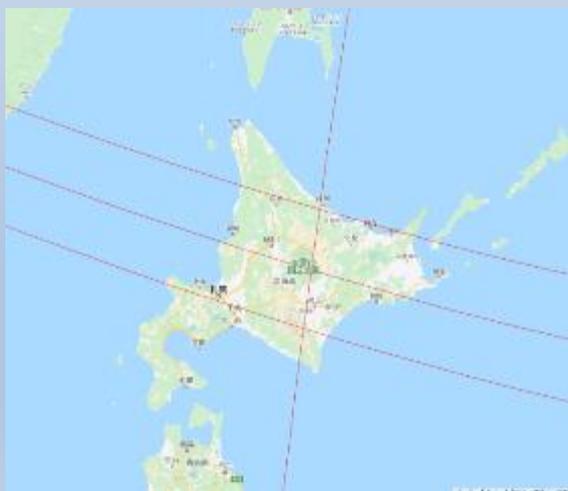
1872 (明治5) 年6月6日・金環



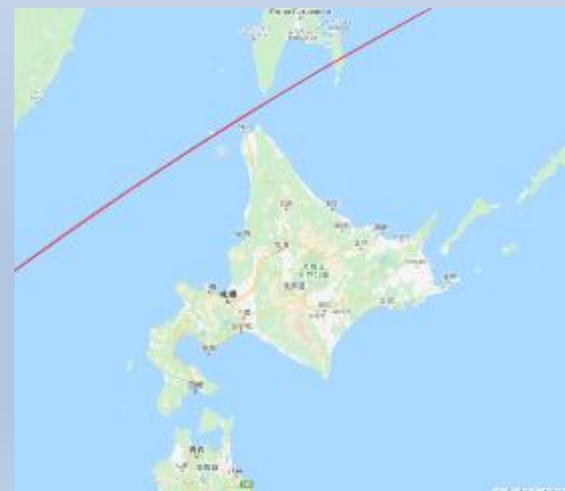
1896 (明治29) 年8月9日・皆既



1936 (昭和11) 年6月19日・皆既



1943 (昭和18) 年2月5日・皆既



1948 (昭和23) 年5月9日・金環



1963 (昭和38) 年7月21日・皆既

